

高等学校「倫理」と「哲学」(1)

—— 自然哲学からソフィストへ ——

瀬 嶋 貞 徳 (地歴公民科)

「倫理」という教科は、それを学ぶ意義が見えにくい教科である。高校で教えていても過去の哲学者の思想に心から興味を持つ生徒は限られている。もちろん多くの生徒はまじめに授業に取り組んでくれる。だがそれは、よい成績を取るためというのがほとんどであろう。将来のことをまじめに考えている生徒であればあるほど、過去の思想を学ぶことに意義を見いだせず、なかには「倫理」の授業を無駄な時間と捉える者もいたのではないだろうか。

プラトンの「想起説」という話が教科書に出てくる。理性的認識は超越的世界である「イデア界」の想起であるという説なのだが、これは、人間が生まれるまえ「イデア界」にあった魂が、誕生とともに身体に宿り、死とともにまた故郷の「イデア界」に帰って行く、という「魂の不死」説に基づいている。この話は授業であまり受けが良くない。生徒によっては「魂の不死」という非科学的な話をまともに受け止めることができず、「倫理」という教科そのものに反感をいだいてしまい、それ以後まったく授業を聞かなくなってしまうこともあった。実際には「想起説」を学ぶことには重要な意義があり、私たちはそれを知っておく必要がある。だが、それが見えにくいのである。

つまり「倫理」という教科は、例えば「英語」のように将来に役に立つことが誰にでもはっきりと分かる教科とは違い、どうしたら生徒たちに授業を聞いてもらえるかを考えておく必要があるのである。そのためには、授業をどう面白くするかといった技術的な問題以前に、そもそもなぜ高校で「倫理」を教え

なければならないのか、「倫理」という教科の存在意義そのものを、あらかじめ考えておかねばならないのだ。

「哲学」についての一般的理解

高校の教科書には、「紀元前六世紀の初頭に「哲学」が始められるようになった」（『高校倫理』実教出版、平成30年、p.21）とある。つまりタレスに始まる「自然哲学」が最初の「哲学」であるとされている。そしてさらにソクラテスが「哲学」に「人間の生き方についての普遍的な真理そのものの探究」という「新たな意味を与えた」とされている（教科書、p.24）。これは、アリストテレスが『形而上学』のなかで、「タレスは哲学の始祖であり、水がアルケーであると言っている」（983b20）と述べていることと、当初形容詞や動詞の形で用いられていたphilosophiaという語を、ソクラテスが初めて名詞の形で使用したということに基づいている。だがこれでは「哲学」を始めたのがタレスなのかソクラテスなのかははっきりしないし、そもそも「普遍的な真理の追究」という言葉だけでは抽象的すぎて、タレスとソクラテスがどう違うのかが分からない。教科書を読んだだけで理解できる高校生はいないのではないだろうか。

とうの西洋の哲学者たちの考えも様々である。平凡社の『哲学事典』の「哲学」の項目にはこうある。

「哲学はその性格、内容、方法をめぐっておびただしい異説の対立を示し、一方の肯定は他方の完全な否定を意味し、個々の哲学のすべてに通じる特色は、ただ名前だけにすぎないという感じをいだかせる。」（pp.973-4）

とうの西洋の哲学者たちでも「哲学」について考え方が異なるというのであれば、私たちにはお手上げということになるであろう。

一方で「哲学」についてこんな印象が、世の中には広まっているのではない

だろうか。つまり「哲学」とは、「人生や世界について難しいことをどこまでも深く考えていくこと」であり、深淵ではあるがいくら考えても答えにたどり着くことはなく、したがって「日常生活には役に立たないまったく無駄なもの」といった印象である。

つまり「哲学」とは人生や世界についてどこまでも深く考え続ける、普通の人には訳の分からない暇つぶしのゲームみたいなもので、教科書どころかとうの哲学者たちもそれが何であるか分からないというのだから、そんなものにつきあう時間があるなら英単語のひとつでも覚えた方がよい、と考える高校生がいても無理はない。「哲学」なんて、そういうものが好きな変わった人だけがやればよいのであって、まともな人が手を出してはいけぬ。将来をまじめに考えている生徒にとっては、「倫理」の授業は「無駄な時間」ということになってしまうのである。

現代の西洋の思想家における「哲学」と「反哲学」

だが現代になると「個々の哲学のすべてに通じる特色は、名前だけ」といった事情に変化が現れるようになる。「哲学」が何であるのかがはっきりと自覚されるようになり、哲学者たちのあいだで共通の理解がなされるようになっていく。なぜなら現代では「哲学」そのものが批判の対象となったからだ。木田元はその著書『哲学と反哲学』（岩波書店 同時代ライブラリー）のなかで次のように述べている。

「現代の哲学者たちは、奇妙なことに自分たちの思想的営為をもはや〈哲学〉と呼ぼうとしない。…メルロ＝ポンティもまたその生涯の最後の時期には、おのれの思想的営為を「否定哲学」とか、さらには「非哲学」「否哲学」「反哲学」など呼んでいた。」（木田p.2）

彼は現代の思想を伝統的な西洋思想に対する反省や批判と捉え、メルロ＝ポンティの言い方にちなんで「反哲学」と呼んだ。現代の思想家たちの思想的営為が「反哲学」であるならば、彼らは伝統的な「哲学」が何であるのかをはっきりと自覚していたのでなければならない。木田はハイデガーの講演『哲学—それは何であるか』（1956年、以下WP）を引用しつつ次のように述べている。

「哲学こそ「ギリシア精神の実存」（WP6）を規定するものであり、…
「われわれの西洋的＝ヨーロッパの歴史のもっとも内的な根本動向」（WP7）をも規定することになった。逆に言えば、「西洋とヨーロッパは、そしてそれらだけが、そのもっとも内的な歴史の歩みにおいて根源的に〈哲学的〉なのであり」（WP7）、したがって「西洋哲学」とか「ヨーロッパ哲学」という言い方自体まったくの「同語反復（トートロジー）」（WP7）でしかない。」（木田p.6）

「思想」とは「ある特定のものの考え方」のこと、「知のあり方」のことである。どんな人でもそれぞれ自分のものの考え方、「思想」を持っており、常にそれに従って判断をくだしている。例えばお昼に何を食べるかを決めるだけでも、健康によいものにするのか、安いものにするのかなど、いろいろな考え方に基づいて私たちは判断をくだしている。そのときの気分で決めるとか、人とおなじものにするという場合でさえ、それはそれでひとつの考え方なのである。そうした考え方は人それぞれであり、人の数だけ「ものの考え方」があると言える。

だが逆に、あるおなじ時代、あるおなじ土地や文化の中で育った人びとは、程度の差はあれ、おなじような考え方を持っているとも言える。日本人には日本人の、西洋人には西洋人の、インド人にはインド人の考え方がある。それを「日本思想」「西洋思想」「インド思想」と呼んでよいであろう。

ハイデガーによれば、「哲学」とはその「西洋思想」の別名なのである。つ

まり、「哲学」という言葉自体に「西洋の」とか「ヨーロッパの」という意味が含まれているのである。それゆえ「ヨーロッパ哲学」という言い方はトートロジーであることになるし、また「インド哲学」「中国哲学」もおかしい言い方ということになるのである。

ハイデガーと並ぶ20世紀を代表する哲学者ウィトゲンシュタインも、おなじようなことを考えていた。後期の主著『哲学探究』で彼は次のように述べている。

「「哲学者たちが」「知識」「存在」「対象」「自我」「命題」「名」などの語を用いて、ものの本質を把握しようとしているとき、ひとは常に次のように問わなければならない。いったいこの語は、その元のふるさとである言語の中で、実際いつもそのように使われているのか、と。われわれはこれらの語を、その形而上学的な用法から、ふたたびその日常的な用法へと連れ戻す。」(I,116)

「哲学の方法が一つしかない、というようなことはない。実にさまざまな方法があり、いわば異なった治療法がある。」(I,133)

「哲学におけるあなたの目的は何か。ハエにハエとり壺からの出口を示してやること。」(I,309)

ここで彼は「哲学」という言葉を二つの意味で用いている。ひとつは伝統的な形而上学としての「哲学」であり、もうひとつはそれに対する批判、あるいは治療としての「哲学」である。伝統的な「哲学」者とは、言葉の日常的な用法を離れてナンセンスな議論に明け暮れている、「形而上学」という壺にはまったハエであり、それを様々なやり方で治療を施して壺から救い出し、彼らを日常的な用法へと連れ戻そうとするのが、ウィトゲンシュタインが言うもうひとつの「哲学」である。後者の「哲学」はハイデガーたちの言い方では「反哲学」ということになる。

現代の思想家たちは伝統的な形而上学を「哲学」と捉え、みずからの思想をそれに対する批判や治療つまり「反哲学」と捉えていた。彼らにとって「哲学」とは西洋だけに生まれた、西洋的精神の「根本動向」であり、それに対して「反哲学」の立場から批判を加えようとしたのである。

だが先ほど述べたように普段の私たちは「哲学」を「人生や世界について深く考え続けること」と捉えている。もしそうならば釈迦や孔子だって「哲学者」であることになる。しかしハイデガーたちによれば、「哲学」とはどの地域でも成り立つような人類の普遍的な営為ではない。したがって私たちは「哲学」というものを誤解していることになるし、それどころか、「哲学」こそが西洋精神の「根本動向」であるとするならば、私たちは西洋思想を、その精神において理解し損ねていることになる。つまり「哲学の誤解」と「西洋精神の無理解」は、おなじことなのである。

現代に生きる私たちの生活が西洋の文化に強い影響を受けていることに、異論のある者はいないであろう。それは科学、政治、法律、経済、文化、芸術、スポーツなどさまざまな分野に及んでいる。だとすればその精神が何であるのかを私たちは知っておく必要があるのではないだろうか。そのためには、巷に出回っている「哲学」の誤解を解いておく必要がある。「哲学」は、それが好きな人たちだけの、役に立たない暇つぶしのゲームなどではない。それは、私たち自身の考え方のうちに潜んでいる、西洋に出自を持つ「知のあり方」であり、現代に生きるどの人にとっても無縁ではあり得ないものなのである。

「哲学」の誤解を解き、西洋思想の精神が何であるのかを学ぶ、高等学校の「倫理」の存在意義もその辺のところにあるのではなからうか。本稿ではその西洋思想の精神である「哲学」が何であるのかを、その出発点であるソクラテスの思想に即して明らかにするために、その準備として、ソクラテスが「哲学」という立場から否定しようとした、ソクラテス以前の思想、つまり「自然哲学」と「ソフィスト」の思想について見ておくことにしたい。

自然哲学の「ロゴス主義」と生命的自然観

先ほど述べたように名詞の形で「哲学」を用いてそこに新しい意味を込めたのは、ソクラテスであった。ハイデガーたちが西洋精神の「根本動向」と呼んだ「哲学」とは、まさにそのソクラテスが新しい意味を込めた「哲学」であった。したがって、タレスに始まる「自然哲学者」たちに「哲学者」という言葉を当てはめることは本来できない。そのため彼らは「フォアゾクラティカー（ソクラテス以前の思想家）」と、呼ばれることもある。まずは、彼らの思想がどのようなものであるのかを見ておくことにしよう。

「自然哲学者」たちはどのような意味で西洋思想の始祖と言われているのであろうか。教科書にはこうある。

「神話的世界観が人々を支配していたなかで、先進的な地域であったイオニア地方に、新たな考え方をする人々があらわれ、哲学が始められるようになった。初期の哲学者たちは、とくに自然（ピュシス）を考察した。彼らは自然の世界はそれ自体で確固とした秩序を備えた存在であり、その秩序は人間の思考によってとらえられ、さらに秩序の根拠も人間のロゴス（理性）の働きによって、自然そのもののうちに把握されうると考えた。」
(教科書、p.21)

イオニア地方で「哲学」が始められるようになったと書かれているが、それは「ピュシス（自然）」が「ロゴス（理性）」の働きによって捉えられるようになったということの意味している。「自然哲学」という思想は、この「ピュシス」と「ロゴス」という二つの要素によって成り立っていると言える。

まず第一に「自然哲学」は「ロゴス主義」である。それまでは、世界を神話（ミュトス）によって捉える「神話的世界観」であった。それが「自然哲学」とともに世界を理性（ロゴス）によって捉える「合理的世界観」へと移行した。

彼らが「自然」を考察するための手段は「ロゴス」であった。では、その「ロゴス」とは何であろうか。

木田元はその著書『反哲学史』（講談社学術文庫）のなかで、ヘラクレイトスの言葉を引用しながら次のように述べている。

「「いっさいがロゴスに従って生ずるにもかかわらず」（断片1）人びとはそれを理解しない。ここでは…ロゴスはそうした「あり方の秩序・理法」と考えられていると見てよいでしょう。そしてヘラクレイトスは、そうした「ロゴスは公共のものであるのに、たいていの者どもは各自の思惑をもっているかのように生きている」（断片2）と非難し、「私にはではなくロゴスに耳を傾けて、万物がひとつであることをそのままに認めることが知というものだ」（断片50）と述べるのです。ここに出てくる「そのままに認める（homologeîn）」という言葉は、おそらく自然のロゴスをそのまま口移しのように語る、そのロゴスに言葉を合わせる、といった意味なのでしょうが、それこそが人間にとっての真の知のあり方なのだ、と言いたいのだと思われます。」（木田pp.73-4）

また教科書は「ロゴス」を次のように説明している。

「本来「言葉」を意味するが「（言語能力・思考能力としての）理性」、「論理」「理法」「（数的）比」など、多様な意味をもつようになった。」（教科書、p21）

つまりこういうことである。すべては「ロゴス（理法）」に従って運動している。そして私たちは、その自然の「理法（ロゴス）」を口移しのように「言葉（ロゴス）」を合わせることによって写し取ることができる。その際の「言語」は「神話的な言語（ミュトス）」ではなく、「論理（ロゴス）」を持った合

理的な「言葉（ロゴス）」である。そしてその合理的な言語を司る人間の能力が「理性（ロゴス）」である。その「理性（ロゴス）」を働かせて世界を捉える思想的営為こそ、「人間にとっての真の知のあり方」としての「ロゴス主義」なのである。

つまり「ロゴス主義」とは、「「理性」を働かせ「論理」的な「言語」を用いて世界の「理法」を捉えようとする態度」ということになる。教科書では自然哲学者たちは「ロゴス」で世界を説明したとされているが、それは、こうした「ロゴス主義」的な態度で世界を説明したということなのである。

それ以来、西洋では「ロゴス」が重んじられるようになった。その意味で西洋思想は「理性（ロゴス）主義」である。現代になって西洋的な「理性（ロゴス）主義」に批判や反省が加えられるようになるまで、常にそれが西洋の文化を規定してきたのである。

教科書でもフロイト、ソシュール、ウィトゲンシュタイン、アドルノ、フーコーといった現代の思想家が、それまでの「ロゴス主義」に対して批判的な態度を取ったとされ、「理性の深層への反省」「言語（ロゴス）への反省」「言語（ロゴス）批判」「道具的理性（ロゴス）」「反理性」といった概念とともに紹介されている。現代の思想家たちに批判される以前の伝統的な西洋思想は、すべて「ロゴス主義」であった。その出発点となったという意味で、タレスが西洋思想の始祖なのである。

さて、彼らが「ロゴス」を用いて考察する対象は「ピュシス（自然）」であった。その意味で「自然哲学」は「ピュシス」の思想であると言えるであろう。では「ピュシス（自然）」とは何であろうか。

日本語でも「自然」には二つの意味がある。ひとつは、例えば「都会には自然がない」とか「豊かな自然」という場合の「自然」であり、その場合の「自然」は「非人工的な領域に属するもの」を意味している。もうひとつは、「それは自然な考え方だ」とか「今日の彼は不自然だ」という場合の「自然」である。この場合の「自然」は「本来のあり方」を意味している。

自然哲学者が考察の対象とした「ピュシス」は、第二の意味での「自然」である。非人工的なものであれ人工的なものであれ、あらゆるものには「本来のあり方」がある。彼らが「ピュシス」を考察の対象としたということは、彼らが「あらゆるものの本来のあり方」を考察したということの意味している。彼らは「あらゆるもの」を「タ・パンタ（万物）」と、「本来のあり方」を「アルケー（根源）」と呼んでいた。つまり「ピュシス」の考察と「万物のアルケー」の探究とは、おなじことなのである。

しかし「万物のアルケー」の探究と言われても、それが何を意味するのかはつきりしない。高校の授業でも、生徒はタレスが水、ヘラクレイトスが火などと覚えてはくれるが、それだけで「自然哲学」を理解することにはならない。なぜなら教科書には肝心な点が書かれていないからである。

木田元は『反哲学史』のなかで、「ピュシス (physis)」が「ピュエステイ (phyesthai)」（「なる」「生える」「生ずる」「生成する」といった意味）という動詞から作られていること、それがラテン語でも「ナトゥーラ (natura)」の元になる「ナースコル (nascor)」がおなじように「生まれる」「生ずる」を意味していることを示したうえで、次のように述べている。

「彼らにとって自然とは、昼夜の交代、四季の移りかわり、天体の運動、海の浪のうねり、植物の生長枯衰、動物の生誕や死滅といったすべての自然的運動を支配している原理であり、人間の社会や国家も、そして神々でさえもが同じ原理によって支配されているように思われたのでしょう。」
(木田pp.71-2)

また岩崎武雄は『西洋哲学史』（有斐閣）のなかで次のように述べている。

「これらの哲学（自然哲学）においては水・無限定なもの・空気というような物質がそれみずから生きて動くものであり、みずから一切のものに変

化するというように考えられているが、このように物質自身が生命を持つと考える考え方を物活観(Hylozoismus)と称する。」(岩崎p12)

Hylozoismusは「物活論」と訳されることもあるが、「自然哲学」とは、このように生命がモデルであるような自然観、つまり「生命的自然観」に基づいた思想なのである。フォアソクラテイクが「自然哲学者」と呼ばれるのは、彼らのほとんどが『自然について (Peri physeos)』という題名で本を書いたと伝えられていることによるのだが、これは本来『世界について』となるはずの題名なのである。だが彼らにとって世界は「生命的なもの」つまり「ピュシス」であったがゆえに『自然について』という題名になったのである。

私たちは世界をどのようなものと捉えているだろうか。日常私たちの身の回りには生命や物質であふれている。動物や植物は生命であり、机や石は物質である。だが究極的には、その生命もみな原子や分子でできあがっているのだから、すべては物質であると私たちは考えているのではないだろうか。私たちは物質をモデルにした自然観、つまり「物質的自然観」に基づいて世界を見ているのである。私たちと自然哲学者たちはまったく異なった仕方で見ているのであり、そもそもお互いに理解し合うことは難しいのである。

生命は成長するが、物質は成長しない。成長しない物質としての世界を探究するためには「それは何であるか」と問えばよい。だが生命は成長するものであり、目の当たりにしているものは、成長の過程を経て目の前に現れたものである。したがって成長する生命としての世界を探究するためには、「もとのもの(アルケー)は何であったのか」と問う必要がある。なぜ彼らは「万物のアルケー」を探究したのであろうか。それは彼らが「生命的自然観」を持っていたからである。私たちが「自然哲学者はアルケーを探究した」と言われても理解し難いのは、そもそも私たちと彼らの世界観が異なっているということに原因があるのだ。

こうした「ピュシス」の思想はソクラテスの「哲学」の思想によって否定さ

れることになる。ソクラテスの「哲学」は「ピュシス」の思想に対抗するために、彼によって考案された立場である。そしてそれが、ハイデガーが言うように、西洋精神の「根本動向」となったのである。

以上のように「自然哲学」には「ロゴス主義」と「ピュシスの思想」という二つの要素が含まれている。現代に至るまで西洋文明に影響を与え続けた「ロゴス主義」の出発点となったという意味で「タレスが西洋思想の始祖」なのであり、他方「ピュシスの思想」を「哲学」の立場から否定し、その立場が西洋的精神の「根本動向」となったという意味で、「ソクラテスが西洋思想の始祖」なのである。

ソフィストの「相対主義」と生命的自然観

一般に古代の西洋思想は、「自然哲学」「古典期」「ヘレニズム期」という三つの時期に分けられている。年代で言うと「自然哲学」が紀元前6世紀の初頭から、「古典期」が紀元前5世紀頃から、「ヘレニズム期」が紀元前4世紀後半から始まるとされている。「自然哲学」時代の思想家が考察の対象にしたのは上述のように「ピュシス」であった。それに対して「古典期」では「ノモス」、「ヘレニズム期」では「個人」というように考察の対象が変わっていったとされている。

「古典期」の代表的な思想家は、プロタゴラスやゴルギアスなどのソフィスト、そしてソクラテス、プラトン、アリストテレスの師弟関係にある偉大な三人である。「ソフィスト（知者）」とは、紀元前5世紀頃アテネがギリシアの政治や文化の中心となった時代にアテネに集まってきた知識人であり、おもに弁論術の教師として生計を立てていた人びとである。「ヘレニズム期」を代表する思想家は、エピクロスとゼノンである。

だが実際には事情はそう簡単ではない。ソフィストはソクラテスたちとおなじ「古典期」に分類されてはいるが、その思想の中身からすれば、むしろ「自

然哲学」との結びつきが強い。ソクラテスはソフィストに対抗するために「哲学」の立場を考案するのだが、それが「ピュシスの思想」の否定につながるのは、ソフィストの思想のなかに「ピュシスの思想」が含まれているからなのである。

木田元は『反哲学史』のなかで、ヘラクレイトスやデモクリトスにおけるピュシスとノモスの離反についての深い考察のあとで、ソフィストのひとりアンティフォーンの言葉を根拠にしつつ、次のように結論づける。

「古いピュシス的存在論を墮落したかたちで保持しつづけようとしたのが、ソフィストたちの立場だったと言えましょう。」(木田p.79)

また岩崎武雄の『西洋哲学史』にもこう書かれている。

「かれら（ソフィスト）の根本的立場はあくまでも従来の自然学者の立場と同じであったと言うことが出来る。」(岩崎p.32)

だがこれはよく考えればあたりまえのことではないだろうか。なぜなら、これからソクラテスやプラトンが登場して西洋的精神の「根本動向」となっていく新しい思想が生み出される以前に、アテネに集まってきた知識人が持っていた知識とは、それまでの自然哲学的な知識でしかあり得ないからである。

どちらにしても、この点は大事である。なぜなら、この点が見えていなければ、ソフィストに対抗したソクラテスが否定しようとしたものが「ピュシスの思想」だったことを、見逃してしまうからだ。教科書には、この大事な点が書かれていない。むろん何もかも教科書に盛り込むことは不可能であるし、西洋思想を理解するうえで大切なポイントが欠けていたとしても、それは仕方のないことであろう。いわば教科書というものは、ピースが欠けたジグソーパズルなのである。その欠けたピースは、その都度こちらで補う必要があるのだ。

ここで「ソフィスト」について説明しておきたい。上述のように彼らは紀元前5世紀頃、アテネがギリシアの政治や文化の中心になった時代に、アテネに集まってきた知識人であり、アテネの民主制の発達とともに必要とされるようになった「弁論術」を教える教師として、生計を立てていた人びとであった。当初彼らは、アテネの人びとに対して啓蒙的な教師の役割を担っていたのだが、アテネの民主制の過度の発達にともない、「詭弁術」の教師へと変わっていったとされている。教科書でも彼らはアテネの「人々の価値観に混乱をもたらした」と否定的に書かれているし、いまでも英語でsophisticationと言えば、「詭弁」とか「へりくつ」といった、否定的な意味で使われている。そして話の流れとしては、ソフィストを否定するかたちでソクラテスが登場したというふうになっている。その点に関しては、教科書やどんな哲学史の本でも大差はない。だが、なぜ彼らは「詭弁術」の教師に墮落してゆくのであろうか。その点をはっきりさせておかないと、ソクラテスが何を否定したのかが分からず、「哲学」の立場の理解も曖昧なものになってしまう。

ソフィストの立場は、ソフィストの代表者プロタゴラスの「人間は万物の尺度である」という言葉で表現されるように「相対主義」である。「相対主義」とは、ひとことで言えば「相対的真理だけを認め、絶対的真理を否定する立場」である。「相対的真理」とは「立場に依存した真理」のことであり、「絶対的真理」とは「立場に依存しない真理」のことである。「相対主義」は、真理や知識を否定する「懐疑主義」とは違い、真理というものの存在を認めはするのだが、それはあくまでも「誰かにとっての真理」でしかない。したがってプロタゴラスが言うように、人間こそが万物の真理を決める尺度なのである。

さて、このソフィストの「相対主義」は、どのようなかたちで「ピュシスの思想」を受け継いでいるのであろうか。「自然哲学」の立場では「ピュシス」こそが真の世界であり、それは「生命的なもの」であった。「自然哲学者」たちは、その生命的な「ピュシス」に潜む原理を探究した。それに対してソフィストは、その原理が人間には隠されていると考えたのである。ソフィストによ

れば、人間が見て取ることができるのは「ピュシス」ではなく私たちによって作られた社会や国家、つまり「ノモス（習慣・法）」だけである。だが、「ピュシスの思想」を受け継ぐ彼らにとっては「ピュシス」こそが真の存在であり、「ノモス」はそこから逸脱した仮象の存在でしかない。したがって「ノモス」の世界に住む私たちにとっては、すべては人為的なものにすぎず、そこには絶対的な正しさは存在しないことになる。あるのは「相対的な真理」のみであり、それゆえ「相対主義」こそが正しい立場だ、ということになるのである。

ところで「相対主義」は、そもそも否定的に評価されるような立場であろうか。むしろ、自分の考えだけが絶対的に真理であるとみなして、それを他人に強引に押しつけてくる人のほうが、よっぽど有害である。「相対主義」は、私にとって正しいことが、かならずしも他人に当てはまるとは限らないのだから、他人の正しさも謙虚に認めよう、という立場であり、ただちに「人々の価値観に混乱をもたらす」ようなものではない。

だがソフィストはその立場に立って、社会的要請からとはいえ、「弁論術」の教師となった。本来ならば、絶対的に正しいものはなく、どの考え方も見方を変えれば正しいというなかで、あるひとつの考え方が社会的コンセンサスを得ようとするためには、少数意見にも耳を傾け、お互いの意見を尊重し合いながら議論を尽くして、誰もが心から納得できるようなものを作り上げていこうとする努力が必要であろう。だが彼らは「弁論術」を重んじた。それは、そういう努力を怠り、口先だけの弁論の力で相手をねじ伏せて、自分の考え方を強引に押しつければよいと考えていた、ということの意味している。

つまりソフィストたちは、ある考え方が社会的コンセンサスを得るために必要なのは、それが誰もが納得できるようなものに仕上がっているかどうか、という本質ではなく、詭弁で相手をねじ伏せればよいという非本質的な部分で勝負は決まるのだ、と考えていたことになる。「相対主義」は有害な立場ではないし、「弁論術」も人間にとって必要なものであろう。だが「相対主義」的な立場に立って「弁論術」を教えていたという点に、ソフィストが「人々の価値

観に混乱をもたらし、アテネの民主制の墮落をまねいた、と言われる原因があるのである。

「相対的真理」しかないという立場から「弁論術（レートリケー）」を駆使することに専念したソフィストに対し、「絶対的真理」を認めて、それを「問答法（ディアレクティケー）」によってどこまでも追究しようとしたのがソクラテスであった。彼は、その「絶対的真理をどこまでも追究する運動」を「愛知」と呼び、その立場に立って、ソフィストに対抗しようとした。そして、その立場がそのまま伝統的な西洋精神の「根本動向」となったのである。次の稿では、そのソクラテスの「哲学」の立場、そしてそれがどのように弟子のプラトンに受け継がれたのか、について考えることにしたい。